

衝
口
發

○明治大帝の御製、蘆間の小舟に云く、
取る棹の心ながくも、こぎ寄せむ

あしまの小舟障りありとも

これ三國干渉に耐忍の聖意を寓せられたるもの、温
藉の間に帝者の大度量を見る。此御製、田中青山伯
より聽く。

○余嘗て勝海舟畫する所の富士の圖を藏す。一俳句
を題して云く、「三國にふみ跨れや富士の山」、蓋し三
國干渉に對し痛憤を發したる者。

○世間進歩を思ふもの、終に走る。走つて尙ほ足ら
ず、疾走す。而して疾走の餘、蹶かざるもの幾許ぞ。
孟子の所謂百歩にして止み、十歩にして止むも亦是
れ走るなり。寄語す徐行せよ、蹶跌の敗なく、こゝ
に初めて進歩を見ん。

○京師相國寺に巨額の金を喜捨して山門の建築を助
けたる者あり。住職其人に會する數々なるも、嘗つ

て謝意を陳ぜず。其人或時之を責む。僧一喝して曰
く、汝の喜捨は佛如來に獻じたるなり、汝の榮とす
べし。吾豈汝に謝するをせんと。此住職相國寺に著
名の高僧と聞く、惜むらくは名を逸す。

○人より贈られたる小冊子中、僧日蓮の遺文一篇を
收む。弘安二年松野殿女房より食料を贈られて謝す
るの書簡也。

(一) 麥一箱、いゝのいも一籠、瓜一籠等旁々の物、
六月三日に給候ひしを、今まで御返事申し候はざ
りし事恐入て候」(二) 此身延の澤と申す處は甲斐
國飯井野、御牧、波木井三個郷の内、波木井の郷の
戌亥の隅にあたりて候。北には身延嶽天をいたゞ
き、南には鷹取ヶ嶽雲につゞき、東には天子の嶽、
日とたけ同じ、西には又峨々として大山つゞきて
白根の嶽にわたれり。猿のなく聲天に響き、蟬の
さへづり地にみてり。天笠の靈山此處に來れり、

唐土の天台山親アツクに見ゆ」(三)我が身は釋迦佛にあらず、天台大師にてはなけれども、曲々晝夜に法華經をよみ、朝暮に摩訶止觀を談すれば、靈山淨土にも相似たり、天台山にも異ならず」(四)但し有待の依身なれば、著ざれば風身にしみ、食はざれば命持ちがたし。燈に油をつかず、火に薪を加へざるが如し。命いかでかつぐべきやらん。命つぎがたく、力絶えては、或は一日乃至五日、既に法華經讀誦の音も絶えぬべし。止觀の窓の前には草しげりなん」(五)かくの如く候に、いかにして思寄せ給ひぬらん」(六)鬼は經行の者を供養せしかば、天帝哀みをなして月の中におかせ給ひぬ。今天を仰ぎ見るに月の中に兔あり」(七)されば女人の御身として、かゝる濁世末代に法華經を供養ましませば、梵王も天眼を以て御覽じ、帝釋は掌を合せて拜ませ給ひ、地神は御足をいたゞきて喜

び、釋迦佛は靈山より御手をのべて御頂をなでさせ給ふらん」(八)南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經、恐々謹言」

弘安二年乙卯六月二十日

松野殿女房御返事

是れ日蓮遺文の逸品と云ふにあらず、然れども讀過其妙を感じざる能はず。元來日蓮の文は簡勁の處に其特徴を見る。親鸞の文、簡はあれども勁はなし。前者は男性的にして後者は女性的なり。前者は人を鼓舞し、後者は人をして泣かしむ。前者は陽氣にて激切、後者は陰氣にて沈痛。兩人の人格と教義の異なる、自から然らざるを得ず。今此文を見るに、大體八段に分つを得べし。第一段先づ惠贈を謝す。第二段己れの居所の風物を叙し、暗に天竺の靈山リウサン、唐土の天台山に比す。形容にサブリミターあり。此筆無くんば、靈山、天台山に比する能はず。而して此

叙景は到頭第三段を起すの地を爲す。第三段暗に己れを釋尊、天台大師に擬す。豪放の氣宇掩はんとするも能はず。第四段筆路一轉、生ある者薪炭油米無くして争で持續し得んと人間の本音を吐き、終に己れ無くば「法華經」「摩訶止觀」誦讀の聲も絶たんと、己れ故に供給を欲するにあらざるを云うて地歩を占め、第五段意外の同情者を得たりと、喜びを抒ぶるの地を爲す。第六段佛典中の好譬喩を引き來り、謝詞の前提とする處妙を極む。而して「今天を仰ぎ見るに月の中に兔あり」の一句、眞に萬斤を扛ぐるの力あり。第七段初めて謝意を陳ぶ。而して其の陳べ方は流石に宗教的にして説教的雄辯を發揮して餘蘊なし。此の數行の文を誦する信徒、今日に於ても容を改め合掌を禁する能はず。況んや當時謝書を贈られたる崇拜者其人に於てをや。凡そ各宗派に於て、人を化導するに力あるは、經典よりも祖師の親翰にあ

り。畢竟親翰は其人の寫眞と蓄音機とを兼ねたる者、宛がら其人の警教に接すると同じきが故也。○物を惜しまざる人なり、唯だ名譽を惜しむ。物を惜しむ人なり、却つて名譽を惜します。妙なる哉。○日本の活版所の著者に對する苦情は、植字後多く文章を訂正するに在り。而して最も苦情の多きは加藤弘之翁に在りとす。翁活版所の苦情に對し、却つて常に叱していふ。活版の活版たる所以は自在に組直し得るに在り、然らざれば死版のみと。聞く、米國に在つては、植字後著者の意を以て文字を變更する時は、一字に二十仙を徴するを例とすと。本邦に於ても、活版社の威力、學者を壓するの日は、亦米國に倣ふに至らん乎。

○陳眉公曰く、人の善を聞けば則ち之を疑ひ、人の惡を聞けば則ち之を信ず、此れ滿腔の殺氣なりと。今の政權爭奪を事とする者即ち是れ。

○足を忘るゝは履の適なり、韻を忘るゝは詩の妙也、最も人に適するの服裝は眼につかざる者は是れなり。

○今の人無趣味なるもの十の七八。人の居を訪うて其目に入るもの、曰く金屏風、曰く銀瓶、唯是れのみ。若し此等無くんば、一物も捉へずして去るを常とす。如斯は世界を狭くするもの、趣味教育、適度に必要なり。

○經驗は勇氣を鍛練する一爐錘也。一たび大故を経れば、病何かあらん、死何かあらん。經驗ある人の勇を稱するを休めよ、渠等は褒められても褒められたいと思はぬ也。

○或人來り、書畫の贋作の多きを歎す。余曰く、書畫の落款に重きを置く風習歎まざれば、贋作其跡を絶つ可からず。舉世實質を尙ぶに至らば、誰れか勞して他人の落款を盗むものぞ。單に書畫のみにあらず、小説、脚本、其他の文章亦然り。若し匿名著述

大に行はるゝに至らば、埋没の文章家始めて頭を擡げん。兎角實質を鑑賞する風尙を欲す。無落款論實地に行はるゝの日は、亦元老の政界に滅亡するの時也。

○昔の茶人は茶を立てる爲めに道具を求め、今の茶人は道具の爲めに茶を立てる。

○佐藤一齋曰く、今の人率れ多忙を説く、其爲す所を視るに、實事を整頓する十の一二、閑事を料理する十の八九と。洵に然り。多くの人は閑事を以て實事となす、閑事除き去れば、多忙といふほどの事あるにあらず。

○一事を成し了り、之を言語に現はさざる者人品高し。今日は、事を爲すに先だち、早く之を吹聴し、事を成し了れば、偏へに人の知らんことを欲す。當世流淺膚にして奥行きなし。

○市井の瑣事、狹斜の消息、本來俗氣ある者、平易

に書けば卑猥愈々甚し。以て小新聞に載すべく、大新聞に載す可からず。唯だ這般の事を特に莊重に書けば、俗氣を免れて一種の趣あり、留意を要す。

○一日校用を辨せんとし、芝に到り、亦麻布に到る。芝には三田の松方侯邸を訪ひ、麻布には徳川頼倫侯の邸を訪ふ。歸途、車中に思へらく、今日は赤穂の義舉に奇縁ある日也。徳川邸は元祿の昔吉良家の邸にして、其の吉良氏は即ち赤穂の讎敵上州の宗家なり。上州、復讐を慮り、此邸に入らんとして果さず、終に仇家の斃す所となる。松方邸は元祿の頃松平隆岐守の邸也、大石父子が預けられたるは此邸にして自刃したるも亦此邸也。

○信州上田町に、往々奇品名器の骨董商により鬻がるゝものあり、傳へて云く、淀屋辰五郎の舊什と。余初め聽いて之れを信ぜず、後淀屋に對し、當時鬻所の處分を行ひたる人、即ち上田侯なることを知り、

漸やく傳説の一概に排す可からざることを感す。顧ふに當時没收の品を幕府の手に歸せず、當該の官吏攫まゝに自家の手に收めたる歟。其往々にして出づる淀屋の舊什は、或は侯より拜領の物なるも未だ知る可からず。

○方今薩摩琵琶の奏する「城山」の一曲は勝海舟作る所、其の譜は西幸吉に依つて成る。海舟は西郷に知己を以て許したる人。西は西郷幕下の人、西南の役、西郷の爲めに戦うて官軍に捕はれ、後釋放を得たる者。此作、此譜、西郷に頗る縁あり、此曲、人の感動を博する、偶然にあらず。想ふに海舟の詩歌俳句致て少しとせず、然れども其詩歌は恐らく一篇と雖も後世に傳はること無けん、唯だ傳はるべきは此一曲あるのみ。

○支那人、讀書、飲酒の要訣を説く。謝少連の讀書の訣に云く、

讀書須少年、僻地、靜夜、早晨、
阮堅之の飲酒の訣に云く、

飲酒須談酒、小杯、細談、久坐、

余最も酒訣を喜ぶ。

○「徐氏筆精」に李益の「馬汗凍成霜」の句を録して曰く、人は謂ふ冬月豈汗馬あらんやと、然れども奇妙の處此に在り、理を以て詩を論ずれば、之を遠きに失ふと。「筆精」の著者、冬月馭馬の經驗を缺くに似たり。「馬汗凍成霜」は詩人の寓言にあらざる事實也。余嘗つて冬天馬車を驅り、信州追分を過ぐ。此日寒氣凜烈、膚粟を生ず。車中、携帶のプランデーを傾け、温を取らんとす。一瓶を倒すも醉を發せず。二頭の馬、御者の背鞭を受けて疾走するを見れば、满身雪を被むるが如く白し。これ流汗の凍結したるも。寒地の人皆之を知れども、「筆精」の爲めに之れを辯す。

○徳川期の戯作書の標題に今人の解し難き者多し。「野傾旅葛籠」「傾城野群談」「茶傾腹立顔」「野白内證鑑」、此等は多く男色と女色を兼叙の書なり。野は龍陽即ち野郎の約、傾は傾城、白は素人、茶は茶屋の約。「剝野老」「野郎蟲」亦男色の書なり。蟲といふは人を毒するの意。剝といふは財を蕩盡せしめて赤保となすの意。男色流行當時を解せざれば、書名も亦解し得ざる也。

○コンニヤク本、洒落本といふもの、皆な口語體の文を行り、花柳の情事を叙す。而かも其の書名、多く漢籍の名に普通のものを取るは、内容と調和を缺くに似たり。當時漢學流行し、漢籍の名、人耳に熟す、之れに倣うて名を撰ぶ、必ずしも其理無きにあらず。然れども其因寧ろ他に在り、名を漢籍に假り漢學者流を罵倒する、一種皮肉の搦手段と見るべき歟。左に四五の書名を擧ぐ。

一 廓通遊子

一 故契三唱

一 巨慶三笑

一 契國策

一 格子戲語

一 通神孔釋三致色

一 文選臥坐

一 起承轉合

一 三體誌

一 酒徒雅

一 記原情話

一 和唐珍解

一 船頭深話

一 遊子方言

一 醒世恒言

一 梅花冰裂

○關東地大いに震ふの日、余偶と坪内逍遙と大隈會館に在り、食卓に着き、箸を下さんとする刹那、此事あり。次日逍遙兄、寄するに國歌數章を以つてす。今こゝに收めて記念とす。

ノアの世の出みづもかくや荒れくるふ

火の海のうちに家ひとほろぶ

大なるゆり大火あれて三も年の

人の力の跡かたもなし

たかぶれる人の心とそり立ちし

石の高どの微塵となりぬ

いしずみゆ築きなほすとなぬせし

人のしわざも人のこゝろも

蟲一つ宿る草なき焼け原に

むさし野の秋の夜をおもふ

○大正十四年秋朝鮮に大洪水あり、龍山鐵道の圖書館水中に没す、館員皆身を以つて免る。水去る後、館内を検するに、書架悉く顛覆して一も立つものなし。書架は抵れ高さ七尺、洋籍滿ちて重量大なり、水中に没すと雖もその位置を保ち得べきに似たり。然るに館員の報を聽くに、書架其五分の四を水に没するに迫んでは到底顛覆を免れずと。一種水壓の實驗、留意を要す。

○今の所謂翻譯、意譯、直譯、義譯の語は何人の案出に係るか、余未だ知らず。偶と杉田玄白の「解體

新書」の凡例を見るに、翻譯、直譯、義譯の由る所を知り得たり、乃ち左に其全文を抄す。

譯有三等、一曰翻譯、二曰義譯、三曰直譯、如「和蘭呼曰^ニ餵^ニ題^ニ驗^ニ者^ニ即^ニ骨^ニ也、則譯曰^レ骨、翻譯是也、又如^レ呼曰^ニ加^ニ蠟^ニ假^ニ餵^ニ者^ニ謂^ニ骨^ニ而軟^ニ者^ニ也、加蠟假者、謂^レ如^ニ鼠^ニ竊^ニ器^ニ音^ニ然^ニ也、蓋取^ニ義^ニ於^ニ脆^ニ軟^ニ、餵者餵題^ニ驗^ニ之^ニ略^ニ語^ニ也、則譯曰^ニ軟^ニ骨^ニ、義譯是也、又如^レ呼曰^ニ機^ニ里^ニ爾^ニ者^ニ、無^ニ語^ニ可^レ當^ニ、無^ニ義^ニ可^レ解^ニ、則譯曰^ニ機^ニ里^ニ爾^ニ、直譯是也、余之譯例皆知^レ是也、讀者思諸、

是れに由つて觀るに、譯の通用語は此書に發するに似たり、但だ意譯を闕けども、義譯之にちかし。

○別項「烟草禮讚」に烟草の禁令の行はれ難きを云うて詳悉せず。偶々「博學叢書」第二を閱するに、支那萬曆年間、禁煙の令、惡弊を生じ、禁を解きたる事を擧ぐ。左に録して「禮讚」の補遺に充つ。

烟草本艸未載、萬曆年間偶見^ニ閩人有^ニ食^ニ之^ニ者^ニ、崇

禎年間食者頗多、崇禎先帝禁之、至^ニ于^ニ殺^ニ賣^ニ烟者^ニ、以^レ敵^ニ之^ニ、州縣貪墨之官吏借^ニ此^ニ名^ニ以^レ破^ニ人^ニ之家^ニ者^ニ不^レ可^ニ勝^ニ計、晚年帝始諭^ニ内外^ニ弛^ニ其^ニ禁^ニ、言^ニ此^ニ烟^ニ可^ニ以^レ代^ニ酒^ニ而^レ不^レ損^ニ人^ニ、當時至^ニ以^ニ大^ニ群^ニ處^ニ貨^ニ易^ニ者^ニ、何有^ニ廷^ニ之^ニ無^ニ直^ニ諫^ニ耶^ニ、今則海内兒童婦女皆用^ニ之^ニ矣、銀筒竹筒入^ニ口^ニ中^ニ、少頃即醉、此則真酒^ニ也

酒艸亦烟草の一名とすべき歟。

○外國に赴く者に交付する旅行券の形式、今は簡略のものなれども、徳川末期の渡航免狀に録したる條件は甚だ繁雜也。曰く、外人より金を借る莫かれ、曰く、已むを得ず金を借らば、歸國の時必ず返金すべし、曰く、日本同士の交深切なるを要す、曰く、外人を殺傷す可からず、曰く、他の國籍に入るを許さず、曰く、宗教を改むるを得ずと、煩雜眞に驚く可き者あり、亦以つて時勢の相違を見るべき歟。

○山崎博士(覺次郎)の先考、松崎懐堂に師事し、頗る酒を嗜む。嘗つて西京の陶工三浦竹泉に託して盃を作り、之れを同好に頒つ。余博士と舊あり、余の酒を嗜むを知り、贈るに此盃を以てす。頗る大盃なり。匣中一小箋あり、二行の語あり、曰く「一飲限二盞、銘曰、厄思也、再斯可」。懐堂、蓋し「懐堂日曆」中より親筆を摸刻したる者也。博士の先考の特に此銘を採りたるは、筋酒の箴となすにあらん。而かも一飲二盞に限るは酒客の忍ぶ能はざる所、此の盃の殊に大なる所以、亦推するに難からず。

○老子は、楚の苦縣、厲郷、曲仁里の人也。其の地名皆人の嫌厭を買ふの字を冠す。老子の如き風格と理想を有する人を産するは偶然にあらずと。漢字に意を用ゐる日支の人より此説を聽かず、却つて老子研究家英人ドグラスより之れを聽くは奇也。

○人あり、建仁寺の僧河清に標面に賛を請ふ。河清

直ちに筆を下して曰く、

見時如白水、飲則勝丹砂、八十老翁面、春風二月花、

○支那婦人の名、皆瑰麗の語を選んで命ず、風趣擁すべきものあつて輕浮に落ちず。但だ妾の名は綺語を選べども、多くは諧味を帶び、莊重を闕くを覺ゆ。史上に見る妾の名は左の如し。

- | | | | |
|-----|-----------------------|-------|----------------------|
| 比紅兒 | 妾 <small>羅虬</small> | 柳 姬 | 妾 <small>韓翃</small> |
| 園 桃 | 妾 <small>韓退之</small> | 卷 柳 | 同上 |
| 朝 雲 | 妾 <small>東坡</small> | 翠 翹 | 同上 |
| 眞 珠 | 妾 <small>唐牛奇章</small> | 鶯 々 | 妾 <small>元稹</small> |
| 燕 々 | 妾 <small>東坡</small> | 盼 々 | 妾 <small>張建封</small> |
| 紅 々 | | 蘇 小 々 | |
| 愛 々 | | | |

○「沈氏筆談」に云く、自から畫の善惡眞實を判する能はず、人の言に依つて取捨する、之れを耳鑑と

云ふと。今の世、耳饜者流甚だ少からず。

○狩野芳崖、氣を貢ひ權貴に屈せず。某侯嘗て芳崖に畫を囑す。芳崖十數日其邸に臨めども、毎日烟を吹き、茶菓を喫し、晚酌を採る耳。一日、執事、芳崖を責む、曰く、何ぞ早く筆を執らざる。芳崖曰く、俗物言ふをやめよ、余が苦心は毎日喫茶飲酒の間に在り、筆を執る時は則ち畫の成る時なりと。

○天明八年の刊、山東京傳の著「吉原楊子」に娼樓の事情を叙す。中に就て、一嫖客磁石と綽名する者を點出し來る。此の綽名の由來を問へば、日々志す所北に在りと云ふ。讀んで一噓を發す。

○香魚は美濃の長良川の産を佳とし、鵜の捕りたるを特に上品と爲す。明治天皇之れを嗜ませ給へるが故に、長良の漁家、殊に鵜を操縦する七家幸を得ること甚し。他の漁家之れを猜み、揚言して曰く、鵜齒の痕痕に毒を藏すと。宮内省依つて細査し、其無

毒を認むと。是れより鵜齒の痕を留むる香魚頓分に聲價を増す。狡獪の徒、亦隨つて齒痕を贗作するに至る。

○今の陸海軍に大尉中尉少尉の名あるは、高野長英譯する所の「三兵ダクテク」より來ると。曾つて後藤子爵語る。

○蘭醫杉田鶴齋の「形影夜話」を讀む。中に食物の消化に四段あることを説く、蓋し蘭説に據る也。

其説に云く、凡人の飲食、蓋し四化あり。一を刀化と云ふ。刃上宰割キリキこれなり。二を火化といふ。烹煮熱爛カキこれなり。三を口化といふ。細嚼緩嚥カキこれなり。四を胃化といふ。蒸變傳送カキこれなりと。腹中に入るに先だち三化あるを説くは、精にして切なりと謂ふべし。

○茶人の腐心するは湯加減に在り、之れを湯候と云ふ。湯候の如何は直覺に依つて判じ得るのみ、口授

す可からず。茶人は之れを鳥の啼啄に譬ふ。鳥の卵子を温めて雛漸やく長じ、自から殻を破つて出てんとする時、母は其即刻恰かも嘴を以つて殻を衝き破る、其の氣合、内外眞に相合す。湯候も亦此呼吸無かる可からずと。

○「鐵は熱したる時に打たざる可からず」是れ西洋の諺也。機逸す可からずと云ふの外、積極的強烈の意味あり。吾れ此語を愛す。

○坂本龍馬の背に大なる「ホコロ」あり、寸餘の毛叢生す。龍馬の名のある所以。

○江藤新平、佐賀藩に仕ふるの日、罪を獲て山中に竊居し、「竊居嚙語」を著はす。中に就て自由貿易を唱ふる一篇あり。其論旨、國際的自由貿易にあらず、各藩の間に有無相通ぜんことを主張したる者なり。獨逸の聯邦にも嘗て日本と同様の事情あり、隨つて江藤と同一の議を建てたる學者あり。江藤、洋學に通

ぜざれども一種の識見あり。其司法卿となり、娼妓を解放せんとするや、自から布達案を作る、曰く、娼妓は牛馬と一般、既に牛馬に齊し、如何ぞ憤をハタルを得んやと。

○太陽系の軌道に周轉する諸星の内、往々軌道を逸して地球に近かんとするものあり、邦人之れを夜這星といふ。洋人亦此星を呼ぶに同じく閨房の語を用ゐ、「エロス」と云ふも奇なり。性慾を色と云ひ、「エロス」といふ、其の音の同一なる既に奇。脱軌の星を東西性慾に譬ふ、更らに奇と謂ふべし。

○骨董舖に會心の物あり、價を問へば不廉甚し。余曰く、卿等は趣味の賊なり、折角面白きものを面白からざらしむと。價も或る度を超え、食の域に入れば、物珍を失ひ、興味索然たり。

○「讀書錄」に云く、感中有寂、寂中有感と、余此語を愛す。

○雷同は、商家の努力して研究を要する心理作用なり。廣告術、畢竟雷同を挑發し鼓吹する術のみ。

○私語は人耳を傾く。喫緊の事、低聲に語るを要す。

○國亂れて身を殉するは易し、世治つて身を護するは難し。乃木將軍難きを爲す者たるを失はず。但た此故を以て不出世の傑と爲すは吾輩服せず。

○婦人に貴ぶ者は貞節、而して操守の嚴は偏狹を意味す、婦人の偏狹遂に咎む可からず。

○三伏苦熱を云ふは斗米足る人の事、貧人何ぞ暑熱を言はん。渠等終日營々僅かに一日の糧を得、渠等の清涼は是れ。

○廣く人に交はる、可也、唯だ泛交は不可也。泛交は無意味にして益あるなし、其終局贏ち得るは多額なる香典の支出のみ。

○三伏の炎熱皆冷を思ふ、唯だ此時に於ても冷を欲せざるは、曰く戀、曰く羨。

○雷に緣故ある大概如電、亡友柏木探古の逸事を語る。曰く、探古雷を恐るゝこと度に過ぐ。彼れは避雷の爲め經營慘憺、人をして一笑を禁じ得ざらしむる者あり。彼れは蚊帳の釣緒を特に萌黄に染めて感電を防ぐことなし、床下より感電を慮つて葦笠の脚下に陶皿を置き、盤上に寢具を載す。微雷動けば倉皇之れに入り、屏息するを常とせりと。

○今の骨董界の所謂る珍品は皆陳品、今の書肆の所謂る珍品は實に陳本なり。新は珍ならず、陳にして始めて珍なり、之れを無用の用と云ふ。人は唯有用の用を知る、無用の用も亦知らざる可からず。

○越後小千谷に數學の大家あり、佐藤虎三郎と云ふ。雪山、子精、解池、皆其號なり。此人の著に「豫法圓理三台」と云ふ數學書あり。弘化三年、余が郷里水原に於て出版せらる。頃者専門家見て驚歎、世界的大著と爲す。小千谷の富豪西脇氏上版、世界の諸

大學に頒布の舉ありと聞く。燈臺下暗し、此著此著者、伊東元帥に依りて指摘せらる。

○中元の音物、扇子は會社より、團扇は商店より來る。齊しく風を煽るもの、一は方、一は圓。方を贈るもの店敷しく腰高く、圓を贈るもの店謙にして人の腰亦低し。偶然音物の形により、それ〴〵を代表するも妙也。

○争うて人の上に立たんとし、排擠日夜これ力め、壓迫又壓迫の世の中、情の天地は別乾坤なり、情界はそれ天國の如き歟。芳原の花魁は古來客の上席に坐するを例とし、支那の遊治郎は他人の目前情婦に撃たるゝを誇りとす。

○戀は低聲に語るべきもの、低聲に語つて趣味あるもの、秋夜蟲のすだくと一般也。

○學校得業の青年兩三輩來り、處世の道を問ふ。余曰く、大抵は既に先輩に聽き了りたるならん、余重

れて言ふを要せず。唯だ何人も恐らく道破せざるものあり、極めて喫緊の事に屬す。他にあらず、諸君今後諸般の事に奮闘を要す、而して戀愛にも亦奮闘せざる可からず。余之れに對しても勝利を冀ふと。○忘は時ありて大切なり。人は餘りに忘れざるが故に却て累を爲すことあり。例へば惡習慣の如き忘れなきものなり、誤まれる思想も忘れなきもの也。人世記憶術を學ぶ、諸子少しく健忘術を講ぜよ。

○世間、千歳の歴史を窮めて、今日を審かにせざるものあり、廣く萬般の事を知つて、一事にだも精通せざるものあり、此等は精力を徒らに消耗する者のみ。寧ろ千歳を觀んと欲すれば、今日を審かにせよ、億萬を知らんと欲すれば、一二を審かにせよ、經濟的に精神を用ゐるの法は是れ。

○一日、二三學徒と會す。余曰く、學者概れ處世の道を知らず、終世研究に没頭して竟に世にあらばれ

ざるもの多し。學者の世に處する、狭く深く修めて地平線を抜くに在り。今の學界の地平線は甚だ低し、之れを抜くは眞に容易なり。一事の研究に専らにして、少しく儕輩を抜けば、世人直ちに許すに大家を以てす。卿等何ぞ此の速成法に據らざる。但し茲に喫緊の一事あり、餘りに多く地平線を抜く莫かれ、世と隔れば低能者流能く辨する能はずと。是れ余一時の戲言なりと雖も、學徒眞面目に聽き、皆然りと爲す。

○故郷に歸省したる一客來りて曰く、吾れ故山を愛す、故山も歡んで吾れを迎ふと。余曰く、君の故山を愛する、君の言の如くならむ、故山の君を歡んで迎ふと云ふは、余速かに信する能はず。願ふに人の故山にあるの時、皆質直朴訥、故山と能く和す。而して其去つて都門に來るや、漸く浮華に流れて亦舊態を存せず。且つ志しを都門に得るもの、故山を忘

れて歸らざるもの十の八九、而して失脚都門に居る能はざる者、已むなく故山に歸る。嗚呼山水無情と雖も曷ぞ斯かる輕薄の徒を歡迎せんや。

○人吾れに長壽の法を問ふ。余曰く、餘りに賢なるも不可、餘りに愚なるも不可、賢愚の間に在るもの壽。餘りに富むも不可、餘りに貧なるも不可、貧富の間に在るもの壽。

○「山出しのまゝ」と標榜して販^ノ販^ノふ者は單に薪炭あるのみ。うぶを喜ばざる世の中なること知るべし。

○平易の二字往々人の擯斥を受く、而も此二字ほど權威ある者あらず。英國民の誇りとする常識も、畢竟平易の知識のみ。支那の先輩亦嘗つて之れを道破す、曰く、道理妙なる處、却つて多く平易の處にありと、又曰く、平易民に近きを政の本と爲すと、眞に然り。

○大聲高調、細理を盡す能はず、慷慨激越の語、往

往聽者に悲憤の感を與へず。年少血氣の演説、此失を免かるゝ者少なし。

○讀んで壯快を覺ゆる語、演じて壯快ならざるものあり、讀んで感興を覺ゆるもの、話して平凡なるものあり。文章體の演説、動もすれば不成功に了る所以。

○言語文章、漫りに最大級の措辭を用ゐる勿れ。唯だ稗氣を告白し、識者の笑を博するのみ。

○人に於て重しとするは人格に在り。此處得れば、小過、疵とするに足らず。此處失へば、衆長、錄するに足らず。

○人晩節を完うするに心を致さざる可からず。閱歷稱するに足るの人と雖も、末路を過てば、多年の功を一朝にして空しうす。或は萬物の終り衰凋を例とすと云ふ。然れども日既に暮れて烟霞却つて絢爛を見、歲將に逝かんとして橙橘更らに芳馨を放つを見

すや。晩年は人生の大晦日なり、掉尾一番を要す。○夏時の快は、早起花に灑ぎ、室を拂うて香を焚き、靜坐半時間、客の襲ひ來らざる間にあり。

○早朝客の來るを厭ふ、唯だ花を齎らし贈るの客を喜ぶ。

○瓢を遊ぶ者、其の色澤に就て語る。曰く、多く酒を飲ましめざれば、玲瓏の紅色を發せずと。流石に瓢は酒器なり、酒徒と其態を同じうす。

○宇宙は男女兩性の寄合世帯なる哉。山河の風景、兩性に毫も縁なきが如し、而も仔細に分析すれば、亦是れ女性的曲線と男性的直線の抱合のみ。

○友人志賀矧川、歴史地理に通じ、且つ義を好む。曾つて米國テキサス獨立(一八五三)の史を讀み、其のアラム戰役に於て節に殉じたるボナムが重圍を脱して援軍を乞ひたる事蹟の、吾が長篠の役に鳥居強右衛門が圍を脱して急を本營に報じて節に殉じたる

と、東西義烈の迹甚だ相似たるに思到り、前年特に石材を鳥居の故土に取り、自ら詩を賦してボナム殉難の事歴を刻し、之れをテキサス州サン・アントニオに於けるアラモ寺の古戰場に建てたり。當時碑の拓本を米國に在る君より寄せられ、頗る君の義を好むの厚きに感じたり。大正四年、偶々岡崎町に家康忠勝の三百年祭を行ふ。矧川一小冊子を著し、アラモの戦と長篠の戦と兩々對照、事情の甚だ同じきを説き、之れを同人に頒つと共に、アラモ表彰碑の拓本を日本のアラモなる鳥居が長篠の危急を報ぜし岡崎城の石壁に掲げ、以て東西意氣の契合を示したり。余之れを聞いて益々矧川の擧に感ず。世人往々此等の案無きに非ず、而も之れを行ふもの少れなり。矧川の擧は、直ちに時俗に對する頂門の一針と云ふべき歟。矧川は岡崎の出身なり。

○朱舜水、明末の國難に遇うて日本に通る、恰かも

康有爲等が日本に來ると一般也。而して朱康の人物學識を比較するに、恐らく朱、康に及ばず。朱は進士及第もせざる田舎學者のみ。之れを傑物の如く持て囃さしむるに至りたるは、水戸藩の鼓吹與つて大いに力あり。

○水戸藩は、一種の見識を以つて朱舜水を聘したる如く、例の自尊的筆法を以つてえらさうに言ひ居れども、實は然らず。幕府の記録に徴するに水戸御預けとありて、事實御預けに相違なし。恰かも陳元贊を尾州徳川、李梅溪を紀州徳川に預けたると同筆法也。當初幕府は明朝を憚り、遁竄の彼等を顧みることなかりき。明朝滅亡して繁累全く無きを見て、始めて三家に預けたり。而して流離の間、何人が朱舜水を扶けたる。曰く、安東省庵即ち其人なり。幕府より預けらるゝに追ひ、初めて款待したりとて識者は水戸の手柄顔なるを許さず。何人も顧みざりし際に

扶けたる省庵こそ稱するに足れ。朱舜水が終生省庵に許すに知己を以てせる、偶然にあらず。

○明末支那の騷亂は、日本に非常の刺激を與へたり。三代將軍寛永度の瑣國は、原因一にあらざれども、對支の政策、其主因と解せざるを得ず。畢竟三代將軍國內の一致を得、能く平和を維持し得たるは、隣邦の國難に見て恐怖したる結果のみ。三代將軍は眞に幸運兒と謂ふ可し。

○韃靼人は當時非常に恐れられたり。朝鮮も、寛永年間、遂に之れが爲めに征服せらる。當時日本も薄氣味わるく、特に朝鮮に使を派し、援軍を送らんことを交渉せしに、朝鮮は嚴に謝絶したり。蓋し韃靼人よりも日本人を恐れたるも道理、文祿の役は彼れ忘れんとして忘るゝ能はざるが故也。但し朝鮮の識者中、日本の援兵を藉るべしと議せしもあり。曰く、日本人砲術に長すと。此等の事實は朝鮮の文書に載

せて明かなり。

○日光廟に朝鮮國王宸翰八字の額を掲ぐ、是れ朝鮮王が我が壓迫を受けたる記念碑とも言ふべきもの。當時朝鮮國、韃靼に困しめられつゝある時に樂じ、宗對馬守、徳川氏に對する忠義立に、強制して書かしたる者。而して宸翰を齎らしたる韓使を特に日光まで行くを強制したり。後幾ばくもなく朝鮮、韃靼に降る。此類蓋し朝鮮王、位を去らんとする名殘の筆と云ふべし。

○日光廟に和蘭製の燈籠あり、これも壓迫の獻上品なり。即ち濱田屋嘉兵衛、彼の國の王子を擒にして歸り、之れを放つに當り強ひて求めたるもの、即ち是れ也。實は外國の獻品のみならず、諸大名の獻品も多くは壓迫に因す。然らば日光滿山の美觀は壓迫の結晶とも言ふ可き歟。

○徳川幕府が朝鮮の聘使に對し費したる經費、多きは十九萬兩に達す。此外沿道諸侯の費したるも亦少

なからざるべく、彦根藩の如き、特に盛大なる饗應をなしたる事實あり。單に幕府の十九萬兩に止まるとするも今の二百萬圓に當る、多量實に驚くに堪へたり。當時幕府の對韓政略、以つて窺ふべき歟。

○朝鮮は當時吾が使節を釜山浦に於て遮り、京城に入らしめざりしに反し、日本に於ては強ひて日光迄行かしたり。徳川の末年、日本も朝鮮流となり、對馬に於て韓使と會見することゝなる。此變遷は國運の消長を間接に云ふものなり。朝鮮の私乘に徴するに、彼れの信使は、日本に來り、到る處款待を受け贈遺を得るを以つて大なる役得となしたりとあり。隨つて應接所を對馬に移すに及んで、朝鮮側に内實苦情を鳴らしたる者ありしも宜なり。

○高野山金剛峰寺を訪うて古文書を閲覽せる一友人語る。古文書中、圖らず直江兼續の一書を得たり。蓋し當時の住職某僧に與へたるものにて、此僧は兼

續の兄なり。文中、所藏の書畫珍寶を二十七隻の船に分載して送る事を云々す、兼續最後の覺悟を定めたる時の書なること知るべし。惟ふに兼續手澤の遺什は、多く金剛峰寺に存すべくして今存せざるは、回祿の災に罹りたる歟。惜むべし。

○井原西鶴の眞蹟甚だ稀れにして、東都に在るもの多くは贋物なり、但だ浪華に往々眞蹟を藏する者あり。曾て水落露石の居を訪うて俳句の短冊を觀る、句書共に佳なり。曰く、

萬思ふまゝならぬこそうらめし、月夜に人目、

團にひとりね 西鶴

夜のにしき浮世は晝のほたる哉

○俳人大江丸、門人の名吟に感じ、激賞措かず、終に譲り受けて自家の集に入る、句に云く、

をし鳥よひと夜別れて戀をしれ

此句の短冊も露石の架中に在り。露石又他に大江丸

の什を示す。

ひとし勢のうちまたもの冬の梅

此等の句は、俳諧を解せざる余と雖も、年を経て終に忘るゝ能はざる也。

○前嶋男の別業、伊豆の蘆名にあり、山に倚り海を望み、形勝甚だ佳なり。書樓に一篇額を掲げて三字を書す、曰く、餘地堂。山岡鐵舟、明治初年の揮毫に係る。余男に堂號の由來を問ふ。男云く、維新匆勿の際、年壯氣銳の徒輕擧往々事を謀る、余常に此等の徒を戒む、曰く、事を企つ、必らず多少の餘地を存せよと。當時余を呼ぶに「餘地堂」の名を以てするに至る。一日鐵舟余の居に來り、酒間三字を書す、即ち是なりと。余男を知る三十餘年、而して男に此の別號あるを知らず、此扁額も亦始めて見る所なり。

○女子破瓜の期に達すれば、渾身肉豊かなり、俗に之を色肉と云ふ。而して醫學家は曰く、是れ懷妊に

對する自然準備なりと。

○花を携へて道を行くものを見るに、花を損はんことを虞れて慙懃いたはるの狀殊勝也、價の貴からざるものにて鄭重の待遇を受くるは花なる哉。贈を受けるけたるものも之れを粗略にせず、必らず瓶に挿んで床上に置く、花の徳と謂ふべき歟。

○足尾銅山より歸來の一客、余に贈るに一函の菓子以てす。開いて閱するに幾片の牛皮、上に烙印を以て、蓮、根、鈍の三字を印す。此三字は故古河銅山王の箴言也、足尾に作る菓子には恰當の意匠也。

○藝妓の戀は素人の戀よりも激切なり、思はぬ人に思はれ、其都度戀を刺激するに因る。

○不見轉藝妓、貞操ある妓に對して言ふ、痴未だ戀の痛切を解するに至らず、欲せざる客に接してこそ情人に對する戀を痛切に感ずるなれと、蓋し前と同理也。

○大人物に投票する莫かれ、中人物に投票せよ。大人物は自家の抱負あり、選舉人の請託に耳を藉さず、中人物は能く選舉人に聽く、中人物こそ眞個に民意を代表すと。是れ逐鹿場裡に所謂運動員が大人物を排して己が候補に幸ひせんと仕組みたる遊説法也。此説固より非なりと雖も、而も俗衆を動かし、效あり、何れの邦土に於ても代議制下に第一の人を得ざるはこれが故耳。

○呉服屋は婦人の擅場也、夫婦相伴うて行く、其人は閑却せられ、唯だ後へに従ふのみ。寄語す、男子は此場を婦人に讓るべし、女子の擅場は日本に於て殊に少なし。

○深遠なる學識ある者の教授は平易なり、卑近なり、學問淺薄の人の講義は却つて高尚也、學徒漫りに高尚の説を喜ぶ、卒業上りの青二才に一條の活路ある所以也。

○曾て三絃の名手と話す、其人曰く、どうも今の人は歌を弾かず、三味線をひくに困ると、余其至言に感ず。白樂天の詩に云く「古人唱_レ歌兼_レ唱_レ情、今人唱_レ歌只_レ唱_レ聲」と、古今同歎。

○冬心齋「研々錄」に銘して曰く「雲一縷朝々暮々潤如_レ許、豈待_レ玉女披_レ衣而後作_レ雨耶」、如此き題語、邦人の企及し得ざる所。

○支那の都々一子曰く「相思極處反相恨、何_レ似當初莫_レ識_レ君」

○大丸呉服店主下村正太郎余と舊あり、嘗つて京都の居を訪うて其所藏の書畫を觀る、中に俳人春坡の俳句一幅あり。春坡は蕪村門人にて下村の一族也。句に曰く、

飛び過ぎて、鼻打つ蛙哉

と、大丸が後年突飛の改革に蹉跌するを前知し、暗に諷したる趣あり、余感吟措かず、主人に勸むるに座

右の箴となさんことを以てす。事は十數年前に在り。
○野口英世歸米の後一日、日本大使と相携へて郊外に散策中、驟雨に會ふ。途上の男女之れを見て曰く、あれは野口博士なり、雨に濡らす可からずと、争うて傘を獻じ、こゝに四五男女の間に競争を生じ、博士爲めに趨舍に窮す。而して大使に對しては皆知らざるものゝ如く、何人も顧みる所なかりきと。博士の米人に珍重せらるゝ一端を見るべき歟。

○神戸の鹿嶋秀麿と話次潜水夫の事に及ぶ。鹿島云く、潜水の人に空氣を供給するの業は死活の繫る所、事容易なるに似て、其實緩急の加減細心の注意を要す。甚だ緩なる可からず、甚だ急なる可からず、苟くも懈怠あれば水中の人窒息す。神戸に於ては、例として送氣器を操縦する者に潜水者の妻を用ゐる。妻なき者は親近の婦人を用ゐると。余聽いて感ずらく、婦人は細心のものなり、之を用ゐる固より可、

妻をして良人の命の繩を取らしむるに至つては益々可也、情理共にヨリ以上の技師ある可からず、潜水夫を業とする者の家族の、器の操縦に心得あるべきは言ふを要せず。

○西洋の諺に「アングラー・シャツ(襯衣)ほど昵近の者なし」と、夫婦骨肉如何に近しと云ふと雖も、終に襯衣の近きに及ばざる也。秦豊吉、名優澤村田之助の錦繪研究に襦袢を形容して此間の消息を言ふ、曰く「蛇のやうに女の皮膚に食ひ入り纏ひつき波うち重なり蠕るものは唯肌着ばかりである」、又曰く「女は其生涯を暖かく蒸さるゝ如き肌着の内に懶く太陽の光に背いて身を包む」と、體の秘密を知る者は唯だ肌着あるのみ。

○夏時村落に傲然たるはカホチャ、唐瓜、夕顔の棚などブラ／＼吊り下り居ると、半裸體の婦人が黒く肥えたる乳を臆面もなくブラ／＼現はし居ると也。

渠等は兩々アラ／＼を競争するに似たり、亦是れ天真彌漫の一光景也。

○某歴史家と對話中、水戸家の記録の事に及ぶ。其人曰く、烈公の座右日記こそ眞に奇怪のものなれ。

烈公機密の外に漏れんことを恐れ、特に一種の假名を電信符號の如く作り、之を以て秘書をして日々機密に渉るの日記を叙せしめ、機密に與る重臣との往復文書にも亦此符號を用ゐしめたり。此符號、卒然として見ればタクミありとも見ゆべき好き趣向に似たれども、符號を知らざれば後世日記を解し難き不便あり。曾て藤田東湖斯かる事の幕府の嫌疑を招く種子たらんを憂ひ、一再ならず烈公に廢めんことを勸む、烈公終に聽かずと。知らず、此符號臺帳今尙ほ水戸に存するや否やを。

○久保田米儒、曾つて幸野梅嶺を訪ふ、梅嶺厨に在り、塵と答へて出て、迎へず。米儒怪んで厨に廻り

見れば、澤庵漬の桶上に在りて坐す。其故を問へば曰く、今下婢を馳せ壓石を市に買はしむ、而して未だ歸らず、請ふ暫く待て、こゝを去る能はずと。

○神樂江卷石、一種の風骨あり、南畫を善くす、得意の作あれば携へ來り、余に贈るを例とす。卷石自ら曰く、吾れ未だ大先生たるを得ず、然れども中先生たるを得べしと、自ら中先生の三字を刻して常用の印とす。曾て某旗亭に招飲す、僅かに配膳終る、卷石膳部中一大牡蠣あるに矚目し、諦視多時、終に携へて室外に出づ。物色すれば既に去て在らず。他日卷石に會して故を問ふ。卷石謝して曰く、非凡なる牡蠣を見、プト石莖を入れて見たくなり、折角の款待を忘れて勿々歸宅したりと。卷石の畫に匠氣なきは此風格あるに由る、如斯きの人近來甚だ少くなれり。

○伊藤仁齋の家、今尙京都堀川に在り、儒家にして儼然家聲を墜さざる者、此家の如きは少れなり。曾

て聞く、伊藤家に一個の抹茶碗を藏す。伊藤氏元と堺の人、居を京師に移すに當り、茶碗に盛るに小判を以てし、秘かに携へ、之れを以て家を興すの資とせりと。此茶碗即ち同宗發祥の器なり、器の珍藏せらるゝ所以也。

○伊藤家を訪問の人語る。同家に孔子を祭る廟あり、扁して「仁齋」と云ふ、仁齋先生の號、之より來るが如し。

○大槻如電曰く、島田善根長逝の日、關根只誠倉皇訪ひ來り、戶外より近火々々と呼ぶ。余驚いて何れに火災ありやと問ふ、只誠依つて善根の死を報ず。善根と余等兩人同甲なり、友人の死を以て近火と爲す所以也。

○余の常用の封印「五大力」の三字を古篆に刻す。人多く其意を解せず、實は大俗を雅化したる者のみ。元祿の頃、俗間迷信流行す、曰く、五大力明王の護

符を信書と同封すれば、其書無難に速達すと。後漸く略して封筒の上に五大力の三字を書するに至る、恰かも今日封じ目に減字を書すると一般。余の印文の出典如斯し。

○濫教育をなし、月謝の收入を食る學校は學問の商店也。支那に於ては之れを學店と云ふ。

○獨は人の知らざる所、而して己れのみ知る所也。此の秘密の處に虚心平氣に精思せよ、自から慥懾たらざる者幾許ぞ。

○人事毎に異を樹て、以つて自ら高しとするものあり、吾輩取らず。佐藤一齋曰く、日常の事大抵世俗に従ふ可、但だ事大節に關するもの世俗に従ふを要せずと、洵に然り。苟くも出處進退に關し、我を主とするの時、世に媚び俗に倣するを要せざる也。

○野口英世海外に在りて學名高く、本邦の醫界、此人を誇とするに至る。圖らざりき、此人、熟知齒科

醫血脇守之助門下の人ならんとは。余嘗て血脇氏に戯れて曰く、君の一生の誇とすべきは、齒科専門學校を創立し、幾千の齒科醫を出したるにあらず、唯だ一の野口氏を出したるに在りと。血脇氏は窮苦の間に野口氏に學資を給し、野口氏の今日あるを致せり。

○鐘鼎古器の骨董舖に於けるは錦欄の女帯の吳服店に於けると一般、百金と云ふも可、二百金と云ふも可、二舖の巨利を博するは、主として此の二品に在り。想ふに商賣の秘訣は、人の廉ならんことを欲する者を廉賣して、價の高きを意とせざる者に依つて價ふにある歟。

○書畫骨董、己れの趣味に投ずる者を購ふは可、眞實を人に圖つて定むるも亦た妨げず。己れ趣味を覺えず、單に人の推奨に聽き購ふは不可也。如此きは趣味と相關せず。或は人に誇らんが爲めに、或は他

日價を倍して賣らんが爲めに購ふものあり、これも亦趣味と相關せず。

○浮田和民博士自から學究を以つて居り、讀書の外道樂なし、唯謠曲を學び、能を見て喜ぶ。余嘗つて能の趣味を問ふ。曰く、余敢て能を解せず、唯心を安んじて觀賞し得るは余の快とする所也と。余重れて安心の所以を問ふ。曰く、余何事に就ても説なき能はず、宗教に就ても時に疑惑を發して自から苦悶す。單り能は時代の骨董物、絶對に變改を許さず、可否の論議全く無用なり。觀て心思を勞せざる如斯きもの、天地間他にある無し、余の安心して之を見る所以。而して往々之れを觀て坐睡を催す、是れ亦余の喜ぶ所以也と。浮田博士一流の觀察也。

○嘗つて故五峰坂口兄(仁一)より、卷菱湖の書簡一巻を贈らる。卷中四五の書簡を收む、皆余が郷國村松濱平野安之丞に與へたるもの、蓋し平野氏奮

藏也。安之丞鷗邊と號す、菱湖の門人也。既に師弟の關係あり、其往復、往々秘事を漏らすも宜なり。一簡に六郷兵庫頭の依頼に依り三千兩の米の津出しを請ふあり。當時湊の外、米の積出を許さざる制なり、是に據つて平野氏が密輸出をなしたることを知る。又智恩院門主の菱湖に與へたる和歌を載す、曰く、

菱湖が字をうつすを見て

華 頂 王

かしこくも見るぞ嬉しき葉直なる

むかしわすれぬ筆のすさびを

智恩院門主賜歌の事實は、家藏菱翁自筆由緒書に記しあれど、和歌は略して載せず、此書簡に依り初めて和歌を得たり。一簡妻の死を報じ、一簡歿後の事を云々す、曰く、「昨年より兩度離縁、實は厄介人並に縁者共不心得にて右の仕末、とても届かぬ事と

衝 口 發

明らか此節は召遣にいたし、先穩成體に相成申候」と、先妻の歿後二年ならずして二人迄聚る、家庭の紛々見るべし。又新鴻の實家の借財整理に低利の金を借らんことを請ふの一簡あり。皆な菱翁の傳を補ふの資料に充つべし。余此の一巻を架中の珍となす。○大阪に有名なる高利貸あり、人呼んで鬼權と云ふ。曾つて人を訴ふ。原被法庭に對決の日、鬼權、途上被告に會す。鬼權被告に謂つて曰く、君は法律上の敵なり、然れども經濟は別問題に屬す、茲に我れと君と共通の利益あり、君も恐らく同意せんと、路傍二人乗の人車を僦うて原被兩告同乗す。○浪華に寓するの日、朝來雨あり、終日客無く、旅窓蕭然たり。行李中冬心齋の題語を出して讀む、遂に所感を録す。曰く、我邦、畫に題識あるは文人畫に始まる。文人の畫を作るは文を造ると一般、字を造るの代りに形象を作るとも謂ふべく、胸臆を叙するに

五四七

於て異なるなし、題語は此意味に於て畫の一部とも云ふを得べき歟。胸次畫して盡さざる所あり、題語以つて之を補ふなり。字と畫と形同じからざる故を以つて別物となすは非也。渠等は字を以つて現はし得ざる所を畫し、畫を以つて現はし能はざる所を文を以つて言ふ。到底混融一體、兩々相離るゝ能はず。故に支那文墨大家の題語は、必らず畫に一段の光彩を添ふ。本邦文人亦之に倣ふと雖も往々贅の譏を免かれざる者、學力足らざるに依ると雖も、一は識語即ち畫なることを知らざるに坐す。竹田、山陽の徒僅かに此譏を免るゝ所以は、彼等此理を解するに因るのみ。兎角識語を題する者形式に流れ、往々圖畫を詩文に由りて形容するを能事とす。如此きは唯だ重複のみ、到底贅たるを免れず。圖畫の及ぶ能はざる所に文を藉る、於是識語始めて用あり。然れども此の補ふ意味に於ても往々形式に陥り、畫に就

て直ちに聯想し得べき事を云々する者多し、未だ以つて題語の要を得たりと云ふ能はず。單り支那文人殊に明清の人始めて常套を破り、抱懷を遺憾なく發揮し、畫に託して志を披瀝するものあり、畫を作るの意思を披白するあり、或は畫論を題し、或は故事典故を叙す。其の題する所多様にして、幾んど端倪す可からず、於是畫と題語と互ひに相俟つて趣を添ふ。僕支那文人畫を購ふに當り、殊に長識語あるを欲するも亦此の故也。

○人あり、寺崎廣業を訪うて其の畫名の喧しきを祝す。廣業笑つて曰く、藝の爲めと言はんよりは名の爲めなり」と。蓋し廣業の名必ずしも俗なりとせず、而も商家や所謂の擔ぎ家に氣受ける善き名なり、平易に云へば商賈繁昌と云ふの名なり。江都には今尙御幣を擔ぐもの少からず、中村不折の名をフ印として忌む者投機者流にあり。葵田春草短命の譏を爲し

て早く亡ぶ、而して擔ぎ家亦之を厭ふ。名の畫家の運命を司る、廣業言ふ所の如き歟。

○廣業の書齋、山陽所書「廣業」の二字額を掲ぐ、余の客室又小竹所書「會所」の二字額を掲ぐ。俗と云へば共に俗なり。然れども俗中又一點の趣味あり。寺崎の偶々自家の名を録したる頼家の墨蹟を得たるは珍なり。余の會所の二字も、傍らに「信之初也」とありて「書左氏春秋語」と出典を録しあり、普通の看板とおのづから選を異にす、余の珍とする所以も茲に在り。余曩に此の額を浪華の書肆に得、問へば往時大阪の某町會所に掲げたる者と云ふ。余思へらく、余の居、朝來雜客菌集、一室會所の如し、此額用ぬるべしと、歸來相間に挿み、今尙存す。一日大阪の友人木崎好尙訪ひ來り、此額を見て驚いて曰く、圓らざりき、此の額を君の居に見んとは。是れ實は余の久しく客室に掲げたる者、君の藏となるを見

て、吾は人を得、處を得たるを喜ぶと。

○一夕某旗亭に尾崎号堂と飲む。余号堂の頭髮未だ白を交へざるを珍とし、且つ曰く、髭に聊か白を見るは流石に歸を白狀すと、号堂曰く、西洋の諺に、勞する所より白髮を生ずと、余の頭髮に白を交へざるは頭腦を勞せざるが故のみ。若夫れ髭に白を交ふるは原因あり、余喫烟を廢して爾來益々健啖、多く口舌を勞す、恐らく白を致す所以と。余曰く、寔に然り、唯だ君一大原因を逸す、君の口舌を勞する、豈啻飲食のみならんやと。共に哄然たり。

○森田節齋、氣節を以つて高く標持す、維新の際、河本杜太郎刺を通じて天下の大事を語り、終に曰く、吾輩事を擧げんとするも頭領を缺く、願くは先生起つて余等少壯の輩を統率せよと。河本の此請は蓋し節齋を買ひ冠りたる也、節齋看るく顔色蒼ざめ、座に堪へずして退き、又座に復せず。河本其の頼甲

妻なきを見て倉皇去り、其の家前の酒店に就き立ながら數杯を傾け、高聲節齋を罵倒して去る。學者の氣節アテになり難し、何ぞひとり節齋を病まんや。

○田舎を訪うて常に威容を感じるは素封家の第宅なり。其周邊を圍む老樹の亭々たる、其門戸の堂々たる、其主人の客に對するの懇懇なる、婢僕の主人に従順なる、其庭園の苔むして風韻ある、其座敷を飾る書畫調度のことさらならざる、皆な舊家に威容を添ふるものに非ざるはなし。

○越後魚沼郡降雪殊に深く、土を見る能はざるもの數月。郡民皆雪に飽き、土を思ふ。一客の新潟に來るものあり、街上塵埃の揚るを見て、快哉を叫ぶと。奇に似て奇にあらず、雪國の人情然らざるを得ざるなり。

○關西の俗、養子を迎へて家を繼がしむるもの多し、殊に養子をして事業を相續せしむる多し。是れ適材

を得るの佳習也。紀州に遊ぶの日、校友多く新和歌浦に會す。座中に名門の友數人あり、問へば皆な養子なり。彼等曰く、此地に養子俱樂部あり、養子の多き、知る可しと。余笑つて曰く、紀州は柑橘の產地として名あり、窈かに聞く、柑橘は他樹と接木せざれば佳果を得る能はずと、養子俱樂部の趣意書僕未だ見ずと雖も、恐らく文中此譬喩あらんと。

○偶々九段坂上に散策す、此夕恰かも兩國川開きに會し、佇立して火戲を觀る。想ふ、江戸繁昌の日、列藩諸侯相競うて火戲を演じ、滿都の歡呼連宵相騒ぐ。曾て人の語るを聞く、鍋島閑叟特に此戲を好み、毎年賞を投じて演ぜしむるを例とし、徹宵連發、終に百兩の烟火を打盡す能はざりきと。當時諸侯、一夜を占斷するを法とし、互ひに豪を競ふ、猶ほ今日某の日鍋島ア、某の日山内アと云ふが如き者ありきと。今の富豪、廣告的に財を散じ富を銜ふに拘ら

す、此の快戯に資を投ずる者を聞かず。某々の成家家何ぞ諸侯の舊に倣はざるや。四疊半に一夕千金を散すると執れ。

○俳人大江丸の肖像一幅を齎らし示す者あり、自詠の句を題す、八十七歳の筆也。

春の花、こんなおやぢじや無つたな

洒落の味掬すべし。

○湯淺半月來訪、余の書室に神山風陽の書幅を掲げあるを見、余の爲めに風陽の逸事を語る。風陽嚴格にして苟くも笑はず、門人畏れて仰ぎ見る者なし。

家は京都鉄屋町に在り、庭園に梧桐の大樹あり、人多く之れを目標として訪問す。風陽正室に子なきを憂ひ、秘かに婢に通じ一男を擧ぐ、風陽喜ぶこと甚だし。門人に久保田米倦、谷口香嬌等、畫を善くする者あり、物かに一卷の戲畫を作り、漢詩俳句を題し、曙して桐の雨と云ふ、蓋し先生婢に通ずるの圖

なり。裝潢了り、密かに先生の几案の上に置き、先生の御機嫌如何を覗ふ。流石に翁も此の惡戯に對しては平素の嚴肅を保ちかれ、始めて破顔一笑したりと云ふ。此の一子不幸にして夭折す、翁泣腫甚だしく、豫て讓らんことを期せし秘藏の一刀を售り、自から文を撰んで豐碑を建つ。其文情意備さに到り、一讀人をして同情に堪へざらしむと。

○先賢の書畫を見るに、其人自詠の詩歌無きにあらざるに、古歌古詩を題するを常とせり、謙意見えて奥床しく覺ゆ。近世は拙劣を意とせず、自作を題せざるを不見識となすに至れり。

○骨董の入札會に、札元、同業者に酒食を饗するを例とす。厘毫を争ふ商賈も、一杯を傾くれば、負けぬ氣街ひ氣茲に勃興して、動もすれば十露盤を度外に置くに至る。酒前沈着の氣を酒後遽かに浮燥に變じ、往々價ひを五倍十倍す。是れ札元が費を惜まず

響應を爲す所以也。酒は眞に十露盤を亂る者、唯だ飲を解せざる者此の戰場に於て獨り過なし。

○嘗つて聞く、守田寶丹(治兵衛)大黒天を描くを日課とすと。余頃日偶々人より一幅を贈らる、即ち日課の畫にして、首部に「日課第一千四百二十三號」「明治四十三年庚子八月二十四日」と書し、更に「午前三時二十六分起床、清水修行」とあり。中央に大黒天を圖し、其の上部に三行の書あり、曰く「第一品をよくし、第二價を安くし、第三おせじをよくすべし」と。而して大黒天の畫中に一日の收支を朱書す、曰く「小賣若干、卸賣若干、合計金若干、於帳揚十世主人印」とあり。余他に二三紙を見る、皆此類にして一種の繪日記なり。而して毎紙起床の刻を見るに、早きは二時半、遅きも三時半、起されば必ず清水浴を爲すを例とせり。寶丹の居常以つて見るべき也。

○響庭箕村、酒を嗜み、往々量を過して宿醒を感ず。箕村橋場に僑居の日、隣家と庭圍相通じ、時々庭上隣家の主人と相見れども互ひに一語を發せず。某日箕村宿醒甚だしく、嘔吐苦悶の聲隣家に聽こゆ。忽ち隣家より一婢薬を齎らし來る、曰く、是れ宿醒を解くの劑なり、主人の命にて贈る、速かに服用せよと。平日相見て相語らざる隣人、こゝに始めて聲息を通ず。隣人も亦酒徒にして宿醉の經驗あり、從來冠婚喪祭にも互ひに慶弔せざる者、酒の厄に會して初めて惻怛の情を發す、所謂る同病相憐れむ者。

○箕村の冷語、往々骨を刺す者あり。嘗つて其の紀行を見る。自序に、縦横詭譎を弄して旅舎の不自由に言及し、終に婢の口を藉り一冷語を發す、曰く、夜具粗にしてお氣に召しますまいが、お宅にいらつしやるお積りて御ふしよう下さいと。養生旅舎に徹る者に加ふるの一痛棒。

○一政客一藝妓互ひに相戀ふ、尾崎紅葉、短篇小説に其の情緒を叙し、終に藝妓をして奇抜の傲語を吐かしむ、曰く、妾となるにはあなたは餘りに貧なり、よし／＼意を決して正妻となつて上げませうと。余既に小説の名を忘る、而して今尙ほ此豪語を忘るゝ能はず。

○犬養木堂、善く人に戯る。曾つて夜間電燈を知らざる田舎漢の訪問を受け、其の輝く電光に驚駭しつゝあるに乗じて曰く、此燈の特色は、主人にあらざれば吹き消す能はざるに在り、請ふ起つて試みよと。田舎漢、力を極めて吹けども燈火滅せず。木堂曰く、吾の爲すを見よと、秘かに栓を捻り軽く吹く、而して忽ち燈火滅す。木堂曰く、どうだ。

○至尊の脈を拜診するに、侍醫藤行玉體に接近するを例とす。維新の初め、佐藤尙中、侍醫に擧げられ、其の藤行の不可を論じ、人類本と直立動物たるを説

く。然れども匍匐の例今尙舊の如し。余曾つて某侍醫に就て云々す。某曰く、設令直立を許さるゝも、高貴の威嚴に打たれて匍匐せざるを得ずと。這般の事、理窟を以つて律す可きにあらざる也。

○某日早朝人を訪はんとし、時を約して自動車を備ふ。刻到り、門前轟々の聲あり、思へらく、自動車刻を違へず來ると、倉皇起つて玄関に到る。偶々一人人門より入り來る、余謝して曰く、今より外出を要す、請ふ自動車に同乗して語らんと、共に車中に入り余傲然主席に坐し、客をして側らに坐せしめ、且つ馳せ且つ語る。行く十數町にして、一自動車の追ひ來るあり、背後より呼ぶ。余初めて客の自動車に誤り乗りたるを覺り、笑つて粗忽を謝す。客曰く、我れの自動車も亦賃借の者、君の誤認せるも敢て無理ならずと、哄然として相別る。

○近來自動車の傾漸やく開らけ、東京以外の大市亦

之れを備ふ。昔日に比し便は則ち便なりと雖も、其

の設備未だ完きを得ざるが故に、此便却つて不便を

醸すことあり。余前年大隈侯に隨ひ、自動車を驅り

桃山の御陵を拜す。歸途余の自動車故障を生じ、修

理に時を移すも終に成らず、已むなく徒歩千數町、

漸やく人車を得て旅館にかへる。疾走の便ある自動

機關、一旦損すれば双脚を勞せざるを得ず。是れ便

の極より不便の極に移る者、文明の利器、完備を闕

けば、不便抵れ斯の如し。

○余が郷國柏崎の旅館に友人多く會したる時、隣室

の一行、酔後食を思うて蕎麥を求む。夜更けたる故

を以つて時を経れども辨ぜず。彼等懊惱、其到るを

待つ能はず、自動車を僦うて旅館を出で、某所に到

らんとす。途上蕎麥を搬び來るものに會す。彼等は

自動車を停めて、車中之れを喫して去る。余翌朝之

れを聽いて噴飯す。如斯きは都下に見る能はざる事

に屬す。

○某家に西郷南洲揮毫の四字額あり、文に云く「天

下無雙」、蓋し力士小野川に與へたるもの。傳へ聞く、

小野川の之れを得るや喜ぶこと甚しく、南洲に謝し

且つ請うて曰く、願くは閣下の衣類の斷片を給へ、

一たび閣下の身に觸れたる者は、汚穢のものとなし

可なりと。南洲其故を問ふ、小野川曰く、之れを裝

潢に用ゐて記念に充てんとすと。南洲點頭、直ちに

其の着けたる小倉の袴を裂いて與ふ。此額もと袴地

を以つて表装したるもの、今は改めて金装となす。思

ふに小野川は寧ろ表装を解するもの、表装舊に復す

る、則ち可也。

○高森昌允の詠歌に云く「願はくは老いぬる今の心

にて、はたち許りの身を得てしがな」老者には到底

青年の及ばざる所あり、練達經驗、是れ實に老者が

歳を積んで得る所のもの、蓋し老者の獨擅に屬す。

唯練達經驗を多く積む時は則ち其人墓に入る時也、惜むべきかな。若し廿歳前後にて老者の有するものを有せば如何に幸ならんも、是れ望むべきにあらず。少壯は此點に於て老者を崇敬せざる可からず。

○「勤定と感情」國音近し、而して此四字實に勞働爭議を解くの關鍵とす。近時勞働爭議各所に起り、其原因一ならずと雖も、多くは感情に馳せて勤定を度外に置くが故に、終に收拾す可からざるに至る。爭議の根本は要するに勤定に在り。資本、勞働の兩者感情を去つて虚心に交綏せば、自づから解決の道あらん。吾れは感情の激發、勤定を度外に置くの弊を惡む。

○勞働は神聖なり、何が故に然るか。活動は人類の最も大切なる務めなり、活動の已む時は即ち死する時也、活動を辭するは即ち死を希ふに同じ、人類の萬物に超越する所以は、其天分の活力を十分に發揮

するに在り。勞働者多くは誤つて勤勞を以つて犧牲となし、其の境遇を悲慘となして曰く、其の勞働するは賃銀を得んが爲め已むを得ざるに出づと。是れ實は勞働の本意を解せざるもの也。勞働は金錢を以つて換算す可からざる價值を有す、賃銀を得るは其の結果に過ぎずして、其原因にあらず。勞働を人類の本質的の務めとし、之れを以つて神聖として、始めて之れに興味を感ずることを得べし。之れを犠牲とし之れを悲慘とすれば、爰に倦厭意業生ず。勞働の本義誤る可からざる也。

○偶々書肆を訪うて、一卷の支那小説を観る、署して「綠林五漢錄」といふ。開いて之れを見れば、吾が俗本「白波五人男」を漢譯したるもの也。余爲めに一嘆を發す。

○偶々韓版「奮忠紆難錄」を購ふ。此書、韓僧松雲の事蹟と詩文を收む。松雲は、文祿の役、單身清正

の陣に入り、軍情を偵察したるもの。其の録する所

の「探情記」、讀んで最も興味を覺ゆ。此僧後に使して日本に来る。清正引見して、話次貴國の寶如何と問ふ。松雲答へて曰く「弊國に寶なし、將軍の首を獲て寶となさん耳」と、此僧家語の一端也。

○京城の物産陳列所を訪ひし時、製作頗る粗笨なる竹帚を見る、蓋し朝鮮の僻地に産するもの。余見て笑つて曰く、何ぞ寒山拾得の携ふるものと似るの甚しきやと。歸路浪華を過ぎ、鹿田書店に主人と會して、話次此事に及ぶ。主人曰く、その帚也、富岡鐵齋翁得んことを欲し、僕の渡韓を機とし、囁するに其帚を齎らし歸らんことを以てす、僕諾して終に約を果す。帚の價は甚だ廉なれども、運搬に煩はしく閉口したり。然るに翁喜ぶこと甚しく、これ吾が庭の用となすに足ると、一畫幅を贈らる。所謂る蝦を以つて鯛を釣るの類と一笑す。鐵齋の風格見るが如

し。

○「蠶喰ふ蟲も好きん」とは、吾が俗間に古く傳はる諺なり。人は多く是を以つて吾邦創造の諺となす。何ぞ圖らん、此諺「文選」に出づ。此書、日本に来ること早く、其流布も亦廣し、諺の此書より發して日本化したるもの、ひとりこれのみにあらず。

○肺病の學名「フジシス」といふ、「不治死」と同音なるも奇也。

○吾が郷國の某郡殊に水腐の地多く、農夫水の多きに困しむ。最近排水器を設けて水を排除するに力む。然れども排水の溝渠完からず、往々甲の排水は乙の田を侵すことあり、爰に於て屢々水論を生ず。余嘗つて友人を伴うて此邊を通過し、友人を顧みて曰く、我田引水は何人にも熱するの語也、但だ此處は我田排水の地なりと。

○僧良寛の書名、今都下に喧し、最初此書僧を東都

に紹介したるものは龜田鵬齋となす。鵬齋の越後に遊ぶや、其寛の書を觀て喜ぶこと甚しく、終に私淑其書に倣ふに到る。是れ多く人の知る所也、而して第二の紹介者に至りては、人多く知るなし。維新後東部に一時名を博したる會津の人佐瀬得所の余が郷里水原に来るや、小田島某の家に就て、始めて其寛の書幅を觀る。得所驚いて曰く、越後に此の書壘あるかと、心醉頓に食指動く。得所卒然兩刀を主人の前に置き、曰く、生之れを購はんとすれども、旅費餘錢なし、請ふ兩刀を以て之れと替へんと。主人其意を諒とし、幅を貸し與ふと云ふ。明治の初年、東都に其寛を紹介したるは得所なること以つて知るべし。後中林椿竹越後に來り、此書僧の爲めに碑文を書す、これ多く人の知る所、亦贅せず。

○齒科醫石塚松巖、新潟に業を營み、余と舊あり、余歸省毎に請うて齲齒を治す。某年の歸省、余忙殊

に甚しく、亦齒を治するの時なし、歸期迫まり、勿皇汽車に投じて東上の途に上る。此時松巖、機械を携帶して同車し、車中一齒を抜き去る。鐵道開始以來、車中此事あるは恐らく之れを以つて始めとせん。余歸省毎に郷人余を迎へて宴を張るを例とす、其都度、談治齒の事に及ばざるなし。座中の人戯れて云く、先生既に年老ゆ、毎歲郷國に來る毎に齒を抜く、而して尙ほ抜くべき齒を存するやと、一座絶倒す。○支那の酒饌に珍とするものは燕巢なり、或は燕窩ニョウゴといふ。此燕此窠、普通民家に見るものと同じからず。由來懸崖絶壁、人跡なき所に窠を構ふるが故に、採集容易ならず、故に其價甚だ高し。頃者支那の事情に通する者は語る。曰く、人の懸崖に攀づる、往往墜落の危険あり、近年は猿を訓練して之れを探らしむ。其法、猿に眞はしむるに籠を以てし、數日を支ふるの食料を供す。猿は輕々絶壁に攀ぢ、搜索採

集に數日を費し、唯だ徒らに遊び暮して得る所なく歸るもあり、或は滿籠の糞を瀆らし歸るもあり、其の多きものは百金に値すといふ。吾れば之れを聞き我が長良川に鵜を使喚して香魚を漁するの法を聯想せざるを得ず。

○犬養木堂、往々大隈侯に代はつて揮毫す、而して印の無きを憂ひて、印人濱村藏六に二顆の印刻を託す。余偶々藏六の居に於て既に刻成るの印を見る。

余問うて曰く、これ何人の囑に依るか、藏六實を以つて告ぐ。異日、木堂に會し、此事を言ふ。木堂曰く、君は此秘密を知るか。實は藏六に託するに、一顆の印「門人代筆」の四字を、人の解し難き大篆を以つて刻せんことを需めしに、渠れ應ぜざるが故に已むと。固より詭譎に出づと雖も、一笑を禁する能はず。

○茶筌に片筌と丸筌あり。片筌は即ち丸筌を豎に半

截したる者。昔し茶を點するに片筌を用ゐるを法とし、丸筌は茶碗を洗ふに用ゐる。今は片筌廢せられて、丸筌兩様の用を爲す。此事、家藏の上田秋成の幅の識語にあり、又田能村竹田の隨筆「赤屠瓊々錄」にあり。

○早稻田大學の恩賜館内貴賓室に、銀盃を陳列する大架を置く。其數百に垂んとし、大小錯綜、燦然目を眩す。遠く外國より寄せたるものあり、前攝政殿下の賜ふ所のものあり、皆な野球仕合の戰勝を語る者、「力」の標本は集つて此一室に存す。

○支那の滋強劑に「何首烏」あり、固と是れ一種の草根、其形墨丸に似て、細根纖毛に似たるものを見る。性慾に效ありと爲す所以は、恐らくは其形態に在らん。其「何首烏」と名くる所以は、何氏之れを用ゐて若返り、其の頭髮烏の如く黒しと云ふより來る。支那の媚藥は概れ此類也。

○亡友坂口五峰の遺骸を茶毘に附し、親族、遺骨を
收むるに當り、若干の金塊を得たり。蓋し葬儀に填
装したる者。遺族以爲へらく、此金塊を以つて何物
かを作り記念となさんと、余に之れを圖る。余曰く、
故人印辭あり、宜しく印を作るべし。偶々印篋を閲
するに「長相思」と刻したる印を得、余曰く、宜し
く此印を模鑄すべしと。鑄成り、之れを「五峯遺稿」
の簞題の下に捺して之れを知己朋友に頒つ。

○越後の海岸に曾つて大木材漂着す、其材に「峨眉
山下橋」の五大字を刻す。此海濱、椎谷侯の領地に
屬するを以つて、此物侯の所有に歸す。此事漸やく
江都に傳はり、諸侯の見んことを望むもの多し、椎
谷侯因つて江都の藩邸に搬せしむ。太平の天地、支
那趣味に耽るの時節、此物益々喧傳し、毎日諸侯の
就て見るもの相踵ぎ、小藩の椎谷侯幾んど煩に堪へ
ず。思へらく、如此くんば各藩の接伴の爲め産を破

るに至らん、若かず、見んことを欲する者には、吾
れより其邸に致さんにはと、爲めに運搬用の大なる
蓮臺を作り、爾後訪問を免るといふ。

○國の文野は市聲を聞いて列するを得べし。我が徳
川期に於て江戸の街頭は喧囂の聲常に充滿す。曰く
大名行列叱喝の聲、曰く騎馬の聲、曰く肩夫輿卒の
聲、曰く物を齎ぐ聲、曰く藝を賣る聲、曰く行人相
争ふ聲、曰く何、曰く何、幾んど樓指の遠あらず。吾
輩前年北京に遊び、其の市街の雜沓に加ふるに、車馬
の聲、物を賣るに打鳴らす銅羅太鼓の聲、互ひに罵
る人語の囂然たるを聴き、吾が江戸時代の舊時に想
ひ到り、文化を距る未だ遠しとなせり。我が東京今
日の市街は、電車縱横、唯だ鐵の軌るを聞くのみ、
幾んど人語を聞かず、亦雜然たる何等の聲も聞かず、
市上甚だ靜肅、文化の市街は則ち如此し。

○徳川期に盛行せる多種多様の浮世繪の中に就て、

最も人心に投じたる者を求むれば、吾れは先づ指を五條橋上半若辨慶相争ふの圖に屈せんとす。封建の時代、復讐を倫敦としたる時、幼年の牛若、鞍馬に劍道を學び、幾多辛酸を嘗めて仇家に報復を圖らんとす。是れ當時年少の同感を惹く大なるトラウデー也。此の美少年に配するに荒くれたる魯智深の大入道を以てしたるは好個のコントラスト。而も大入道、美少年に敵する能はず、屈服臣従したるは、これ少年をしてお山の大将たらしめたる者也。僧侶の權勢尙ほ衰へざりし當時を思へば、僧の屈服は、少年の虛榮心を今よりも一層そゝりたるは言ふを待たず。

尙ほ牛若に穿たしむるに一本齒の木屨を以てしたる如き、瑣事なりと雖も亦少年の意に投じたるや知るべし。然れども此圖ひとり少年の心に投じたる者と爲す可からず。實は甚しく有鬚男兒の趣味に投じたり。元祿の頃男色流行し、花の如き美少年、鬼の如

き奴を伴ふの圖は、既に當時衆道者の喜びし所の案を取り來り、牛若に配するに辨慶を以てしたる好意匠は、衆道家の見て魂飛神銷の畫たりしや想像に難からず。

○曾つてマホメットの傳を讀む。もと商家に仕へ、主人歿する後、其寡婦に思はれて其夫となる。これマホメットの起身とす。後其妻養を易ふるに迫んで、マは教壇に名聲を博すると共に、漸やく亂倫荒暴の行あり。縦まゝに人の妻を奪うて之れを神意に歸する等、羅織甚だ多し。實は此宗の聖典とする「コーラン」は、マが一代の亂倫の記録といふも不可なし。流石に後年其教徒の改削を経たりと雖も、尙ほ亂行の記事の存する者少からずといふ。蒙昧時代の教祖は多く精力絶倫なるが故に亂行少からず、ひとりマホメットに就て云ふのみにあらず。

○往年、肥後龍と富山縣に遊説の時、越後より越中

に赴く途中、親不知子不知の險を過ぐ。今は崖上一路通じて、舊日の難處は眼下に在り。一行中、石を飛ばすの妙を誇る一政客あり、崖上頻りに石を飛ばして喜ぶ。余等試むるに敵する能はず。既にして富山縣泊町の政談演説會に臨む。余先づ演壇に立つ。此頃黨爭激甚、演説中往々暴行を爲す聽衆あり、此日も石を袂に入れ、暗に吾等を威嚇する四五の徒の場にあるを認む。余依つて先づ旅中投石の事を語り、拙者の如きは其の尤も拙なる者、此技の達人は一行中別に在り、投石の技を戦はさんと欲せば、後刻其人の此壇に現はるゝを待てと、聽衆皆笑ふ。而して遂に事無きを得たり。是れ機先を制するもの、演壇に立つもの這般の略を要す。

○尾崎号堂の雅號、もと「琴泉」と云ふ。曾つて某小會席上、森田思軒云ふ、琴泉の號は女性的なり、女流畫家を思はしむと。犬養木堂傍らより、之れを

女流畫家の號と見るは當らず、杉山流の按摩の名と見る、或は可ならんと。此擲揄終に尾崎をして「學堂」と改號せしむ。今の號は保安條例に觸れ追放の時更に改めたる者、學と号と音相通ず。

○畫室は畫家の筆源地、其大小明暗、畫品に關係を及ぼすこと大也。橋本雅邦嘗て云く「平生の望は、千疊敷の巨室に、尺四方の小畫を作らんことを欲す」と、これ至言なり。席の規模大ならざれば畫家の氣宇亦大なる能はず、隨つて大なる床に掲げて調和せざることあり。由來畫の大小は必らずしも絹紙の大小に關はらず、名人の畫は小品と雖も大なる趣あり。古來畫家が寺院を借りて畫席となすも此故也。

○往年、小野義眞、陶製の五百羅漢を作り、之れを向島の邸に置く、後之れを淺草の花屋敷に移すに迫んで、衆庶見て之れを珍とす。余が鎌倉に養病の日、長谷に陶器を製するの家あり、訪うて其主人に會す

れば、其人即ち五百羅漢の製作者也。由つて其の製作當時の苦心を聞く。曰く、五百の羅漢、各々其相貌を異にするは極めて難事に屬す。二百迄は辛うじて相貌を異にし得たれど、意匠全く盡き、それ以上

力及ばず、已むなく三緣山に藏する兆殿司の五百羅漢圖粉本を借り得て、それに據り僅かに功を竣るといふ。此陶工の姓名加藤太兵衛、尾張の人、瀬戸の直系に屬すと聞く。

○陶工苦心を談するの傍らに、老妻侍坐して余に語る。彼れが如く勞多くして酬の少き製作はあらず。

當初千圓を以つて受貢ひ、二百圓を刺すの打算の處、種々附屬品を要し、或は一羅漢を數個作る必要生じ、終に製品八百の數に上り、價は爲めに増加せず、最後決算に迫んで、受けたるもの僅かに八錢五厘に過ぎずと、嗚々苦情を洩らして已ます。太兵衛、妻の言を聽かざるもの、如く、曰ふ、彼れが如き製作を今

一たび試みんことを欲すと、辭色平然たる處に藝術家氣質を認め、余をして感動せしめたり。

○江州商人、天稟の商才を有す。其の儉素、其の忍耐、其の勤勉、其の計算に精なる、支那人に酷似するものあり。大阪の人嘗て語る、江州人來つて店舗を開くや、其附近の同業皆畏る。其儉素と勤勉とは到底敵し難きものあるが故也。果して其の店舗は幾許ならずして成功するを例とす。彼等は妻孥を伴ひ來らず、皆な店舗に宿泊し、夜間と雖も事務を見、亦丁稚を督勵す。其の妻孥あるものは、休暇に乘じ家に歸るのみ。大阪商人の如く、休日遊覽に多少の金錢を散ずるものと其運を異にす。彼等が忽ち産を成す、決して偶然にあらずと。又聞く、江州商人程計算に嚴且つ精なるものはあらず。如何なる大取引に於ても、決算に臨み厘毛の差あれば彼れ必ず争うて已まずと。滋賀縣會を見たる一客曰ふ、他府縣に見ざる

一異彩は、議員各々十露盤を携へて講席に列するの一事とす。豫算、決算、其他數字に關する議案に對し、彼等は十露盤を彈きざれば賛否を謂はすと。

○讀書趣味を詠じたる詩に云く、

富家不用買良田、書中自有三千鍾粟、安居不用架高堂、書中自有黃金屋、出門莫恨無三入、書中車馬多如簇、娶妻莫恨無良媒、書中有女顏如玉、男子欲成平生意、六經勸向窓前談、

此心を以てすれば、讀書は人間無上の樂也。

○狩野芳崖、團十郎の技を喜び、其の渡邊華山を演ずるや、百忙中往いて觀る。此優の品藻態度、華山を扮して遺憾なく、其技亦神に入る。芳崖見て幾んど心醉す。其筆を揮つて畫を作るに至り、芳崖旁かに此優にあらずんば爲し難しと賞したるに、一握の扇子の揮毫終れば、乃ち之れを觀客席に投ず、衆爭

うて之れを得んとして喧囂を極む。芳崖之れを見て憤然として起ち、「華山死す〜」と叫んで去る。歸來芳崖、門人に語る、團十の技は賞すべし、唯だ河原乞食の根性を脱せざるを憾むと。

○河村清雄、洋畫界に名聲藉甚の日、人あり、余を訪うて曰く、聞く、早稻田大學の恩賜館建築成ると、河村に囑して一畫を作らしめ、館に掲ぐるも可ならずや。幸に之れを可とせば、吾れ川村に之れを介せんと。余曰く、止めよ。河村の畫可ならざるにあらず、唯だ彼れ責任なく、畫成るの日之れを典し、或は債鬼に奪はれ、常に囑者を失望せしむ、吾れ其の二の舞を爲すを欲せず。然れども若し無料に書くの意あらば、敢て妨げずと。蓋し河村の成功を危みたる也。其人、川村を訪うて告ぐるに余が言を以てす。數日を経て河村余を訪ひ來りて曰く「無料に書けとは能く言はれたり。吾れは貴下の言を喜び、急に書

く氣を起したり。必らず期日に成功すべし。唯だ畫題は余の選ぶに任せよ」と。余默然諾す、而して心竊かに成功を期せざりき。然るに何ぞ圖らん、期日に先たち畫成り、其の大學に搬入の者を見れば、眞に傑作也。此畫、堅四尺餘、幅十尺に充ち、波濤巖嶼を撃ち、日光波に映するの狀を畫す。蓋し「君が代」の國歌に畫題を採る也。今恩賜館に掲ぐる巨額は即ち是れ。

○早稻田大學の新圖書館支關に大圓窓を劃したる壁あり、總長、下村觀山横山大觀二畫伯の揮毫を請はんとし、一日二畫伯を早稻田に招く、余も亦與る。畫題を定めんとして決せず。倉卒一案を立て、曰く、暗より明に入り、野より文に進む、これ圖書館の徵象也。幸ひに二畫伯あり、明暗文野を分つて擔任を請はゞ好畫を得ん。其の意匠の如きは二氏に任じて可なりと。一座之れを可とし、黒雲の内より旭

日揚るの畫成る。此畫、直徑二間半、金色と漆黒の對照、觀者をして快哉を呼ばしむ。之れを明暗の圖といふもの、實に余が倉卒の發意に基づく。双美として早稻田大學の誇るもの、前に河村の洋畫あり、後に此の日本畫あり。

○高村光雲老人、年少の時、淺草駒形町に住す、曾て語る、當時子規の聲を聞くこと日に幾回と。遊女高尾が仙臺侯を憶ふの句に「君は今駒形あたり時鳥」とあるは紀實の句に似たり。老人曰く、當時駒形の前岸に鬱蒼の杜あり、子規は其内に住み、河を渡り毎日東台の森との間に往復し、駒形は恰かも其の通路に當ると。暮末尙其の聲を聽く、高尾の時代想ふべし。

○世、暴富の人を呼んで成金と云ふ、其の僥倖にして産を爲すを貶する也。然れども一概に成金を貶するを休めよ、成金は成功を意味す、成金盛んに興らざ

れば國運振はず、國力富まざる也。漫りに成金を罵るよりも、其成功を祝し且つ之れをして自重せしめよ。吾人は成金を歓迎する者也。

○人あり、來りて貧民學校設置の事を云ふ。余曰く、休めよ、方今の急は、貧者の爲めに學校を設けんよりは、暴富の子弟の爲め家庭學校を興すの必要あり。所謂成金の徒、多くは素養なく、成功に酔ひて日夕豪奢淫樂を事とし、一家の風紀を棄し、延いて社會の風紀を紊さんとす。如斯き家庭が其子弟に及ぼす影響、洵に寒心すべき者あり、之れを放任せば、其の子弟の前途知るべき耳。今日の急は、此等の子弟を收容する家庭學校を作り、其の生家と隔離し、惡弊を避けしむるに在りと。

○余又成金者の爲めに一策を案す、曰く、渠等の子孫を安泰ならしむる法は、渠等をして多くの産を傳へしめざるに在り。原來産を作る人の子孫必らず

しも産を守るの人にあらず、寧ろ浪費蕩盡、終に身家を亡す者なり。故に餘りに多くの産を子孫に遺すは却つて子孫を賊ふ所以也。成金の人、子孫の圖を爲さんと欲せば、子孫に其の克己自立の精神を失はしめざる程度の遺産を傳ふべし。西洋諸國に於て富豪の巨費を公共事業に散する所以、一は日本と家族制度を異にするにも因れども、實は餘りに多くの産を子孫に遺すの不利なるを知り、公共事業を財産の棄て場に充つる者なり。過大の産を子孫に遺すは無慈悲の至り也。暴富家の安全瓣は、實に富を割いて社會の公共事業に投ずるに在る哉。

○一ツ橋帝大の同窓、毎年例として四谷三河屋に牛肉會を開く、余も毎に與かる。會する者皆な齡六十を過ぎ、四五古稀に達するものあり。但だ當年の意氣尙存し、健啖齋の如し。舊日と異なるものは酒量の減じたる一事とす。嘗つて十二名の同窓の會した

る時、宴後試みに肉量を査して五十三人前の數を得たり。此日酒に專にして幾んど肉を啖はざるもの二人あり、之れを控除すれば一人平均喫する所五人前也。一座云く、此數字、人意を強うすと。而して近く最も健康なる一人を失ふ、荒川義太郎即ち是れ。○一ツ橋帝大の同窓會に田中館愛橋博士も來り會す其の服裝の、フロツクコートに似て稍と異なる所あるに留意したる一友、博士に就て問ふ所あり。博士曰く、これ舶來なり、今次洋行中購ふ所と。酒次、博士終に實を語つて曰く、英國に滞在し偶と天長節に會す、公使館よりも禮裝出頭すべしと通牒し來る。僕行李中之れを闚き、倉皇自動車を驅り、古衣縮を訪うて多くのフロツクコートを見る。皆大に過ぎて體に適ふものなし、唯一衣稍と適ふ、乃ち獲て當日の祝賀を果し得たり。此衣服、フロツクコートと稍と異なる所あるは抑と故あり、實は少年の外套なりと。

一座絶倒す。

○田中館博士、飛行機の研鑽に汲々とし、時に機上の人となる。嘗つて余の屋上一飛行機の來るあり、新聞紙に就て檢するに博士の搭乘しあることを知り倉皇出て、之れを見る。思へらく、飛行研究の犠牲となる者近來少からず、博士も或は終に難に遭ふことあらん乎。余異日博士を訪うて曰く、君を飛行機の犠牲とするは國家の損害にして友人の忍ぶ能はざる所也。請ふ君漫りに他人の作りたる飛行機に乗るを休めよ。若し夫れ自家の工夫に係る者に殉するに至つては別問題なりと。博士謝して曰く、誠に君の言の如し。當日機上の人となりしは、余の發明に係る信筒を驗せん爲めなりきと。頃者博士自轉車に乗り一脚を挫く。余一書を投じて曰く、思はざりき、空中の人、航空機の厄に遭はず、却つて地上自轉車の厄に遭はんとは。吾れは中心今回の奇禍の前者にあら

ざりしを君の爲めに祝せざるを得ず、幸に自愛せよと。

○余先年初めて若干の地を購ふ、思へらく、區々尺寸の地を得る、言ふに足らずと。而して更らに又思ふ、尺寸の地と雖も亦これ地球の一角なり、吾れは今日より地球の所有權を有すと、太白を擧げて起つて踊躍す。

○世界大戦の時、英國一億の資を本邦に募る、余戯れに一友人に勸む、進んで其の募に應ぜよ、一口にても可なり、若し餘財無ければ、物を典しても應ぜよ、世界に冠たる富國に金を貸すは、亦人生の一快事にあらずやと。

○世界大戦後、人種差別論の起るや、余等同窓、偶々四谷三河屋に牛肉會をひらく。酒次、人種の黄白を以つて差別待遇を爲すの非を鳴らし、口角沫を飛ばすものあり。余鷄卵を割り、之れを鍋中に投じて曰

く、見よ、此の白の跋扈の状を見よ、白は幾んど鍋の全面を掩はんとす。然れども卵に貴ぶものは黄也、味の佳、滋養の多き、亦黄に存す、白なるアルビエーメンは、糶子殺中に在る間の食料に過ぎずと。一座好諭となす。

○大隈内閣危念に瀕したる當日、池之端に開催中の江戸博覽會に候の臨場を請ふ、侯請に應じ、巡覽の後一場の演説を爲す。曰く、余も亦江戸趣味を解する者なり、江戸趣味畢竟家康趣味なり。家康不世出の天資を以つて治務に練達す、徳川の治世、持續三百年の長きに渉る者偶然にあらず。家康は外柔内剛の人、常に外部質素の服裝を着け、人の見る能はざる内部に華麗の服を着す、此の奥味しき所、家康流とも云ふべく、江戸趣味の源は之れに發す。江戸繁昌の時花柳の雄を辰巳(深川)とす、辰巳藝妓の風は、外部極めてツミにして、隠れたる所に華麗目を眩する者

あり、是れ實は家康好也。一校書三草子、當時の豪傑武田耕雲齋に思はれて、脇鐵砲を喰はす、これも亦外柔内剛の家康の薰陶に外ならず、と側らに坐せる後藤鬱齋を顧み、暗に鬱齋を耕雲齋に比して冷嘲するに似たり。侯の演説多方面に涉り、皆成功す。而して内閣危急の當り、辰巳藝妓を評論して平然たり、侯の胸次の洒落又見るべき歟。

○三宅雪嶺、辯訥なるも、其説奇警、聽者に深刻の印象を與ふ、雪嶺は一種の雄辯家と云うて可なり。余嘗つて雪嶺の演説を評してアプト式と云ふ、其の突兀たる調を云ふのみにあらず、言々語々、刻み刻んで之れを聽者の腦に印せざれば已まざるの概あるが故也。

○中村進午博士の別業、千葉縣一の宮に在り、余嘗て同人と同訪、終日款晤す。余別業所在の地名の老女子と云ふに興味を感じ、博士に勸むるに別業の名

を「天姥山莊」と命せんことを以てして曰く、是れ佳名なり、君早く取らずんば、他の別業を此地に有する者必らず取つて名とせん。博士の答は意外なり、曰く、家兄に圖り、然る後決せん。博士の兄を敬するの一斑以て見るべし、其美質稱すべき哉。

○故長谷川泰常に曰く、顛狂院を起すよりも、兩性をして性慾を満足せしめよと。余初め其意を解せず、後某醫學大家が顛狂の起因を研究し、兩性、性慾を果し得ざるため發狂する者甚だ多しと説くを聞き、初めて長谷川の説の味あるに感ず。

○柳亭種彦嘗つて艶麗の筆を揮うて、男女の交情、遊冶の狂態を叙し、江戸繁榮時代、浮世繪と共に並び稱せらる、而して種彦の人と爲りを想見し、哀傳、三馬の徒の如く、品性高からざる戯作者と爲す。然るに事實は相反す、往年、淺草老書舗淺倉屋の老人余に語る、戯作者中、敬服すべき人は唯だ種彦あり

しのみ。大抵此店に來り書を購ふの文人、店頭に胡坐す、寺門靜軒の如きも亦然り、ひとり種彦袴を穿ち一刀を佩び端坐するを例とせりと。余が架中種彦自筆の日記一冊あり、表紙の見かへしに「様」の字を大書し、附記して曰く、卷中所錄の人に「様」を省略す、此の「様」すべてに通用すと。他人に示さざる私乘に尙ほ且つ此の用意あり、溫藉謹厚の人となり、以つて見るべし。

○友人松平破天荒と新瀉に同游の日、一夕那邊茶屋に飲む。佳人座を圍み、綺羅星の如し。醜陶の後旅宿に歸臥す、破天荒筆を授いて一詩を示す。

綠酒紅燈多_レ所思、風情不_レ如_二少年時_一、白頭初到_二美人國_一、孤枕淒涼聽_二竹枝_一。

余も亦老いて同感同歎を禁する能はざるを憾む。

○曾つて京師の鳩居堂に於て、雲華上人の蘭竹一幅を見る。雲華自題の詩の外小竹の讚あり。雲華の詩

に云く、

我竹唯隨_レ意、吾蘭不_レ用_レ工、何論人取捨、夜座多_二

清風_一、

之れに添へたる小竹の題詩は、甚だ雋味あり、所謂當意即妙、亦題語の要を得たる者。詩に曰く、

上人與_レ吾好、因緣如_レ有_レ宿、興到畫_二幽蘭_一、自然添_二小竹_一、

○地方の新聞、往々噴飯の記事を掲ぐ、某大官を見送る記事中、各階級の人を擧げ、折花攀柳の徒もありと附記す、蓋し藝妓を斥すならん。曷ぞ知らん、折花攀柳は妓を遊ぶものなることを、主客全く顛倒す。近來漢語を誤るもの比々たり、單りこれのみにあらざる也。

○不朽の名著、讀み來れば抵ね平凡なり、論孟然り、ルソーの民約說然り、羅馬法然り、エイソップ物語の類も亦然り。此等は、世に出てたる當初、皆一世

を變動したる者なり、而して今平凡を感ずる所以は、深くして、其の書中言ふ所、多くは今人日常之れを風化多年、其の及ぶ所廣汎、其の人心に浸潤する所、念とし又之れを行ふ、故に一讀致て奇を感ぜざる也。

隨筆春城六種 終